
月光のアルキディス

朝霧 絶姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光のアルキディス

【NZコード】

N2197J

【作者名】

朝霧 絶姫

【あらすじ】

欠けた月、『欠月 ブライト』。

それは妖しい赤い輝きを放ち、今宵も一匹の異形の生物、月獸を吐き出した。

美しいこの世界は、一秒一秒止まることなく世界は滅びを迎えるとしているのだ。

月獸を人々に気付かれず、殲滅するのが「黒衣の騎士団」である。月獸と黒衣の騎士団の終わる事のない戦い、終止符を打つべく

今宵も戦いへと赴く。

プロローグ 黒衣の騎士団（前書き）

えー、この小説はある程度残酷な描写を含む予定です。
……正直、予定なので、もしかしたら含まないかも知れませんが、
一応注意であります。

プロローグ 黒衣の騎士団

漆黒の闇が広がる空の中に広がる、無数の星屑と黄金の輝きを放つ莊厳な満月は一つの藝術作品だ。

そこには意思や法則性など存在せず、自然に、赴くままに黒一色のキャンバスには、選ばれた煌めきを持った星と月以外には相応しくない。

何もかも全てが自由氣ままに、宇宙とこの名のキャンバスには『夜空』という絵が描きあげられた。

黄金比で作り上げられた、一ミリの不確定も許されないこの絵は纖細で、儂いこの絵。

そして、纖細で美しいものこそ壊れやすいのだ。

満月の端。闇に飲み込まれるよつて円の一欠け、そのまま姿を一気に消し去られた。

欠けた月、『^{ブライア}欠月』。

それは妖しい赤い輝きを放ち始め、今度も一匹の異形の生物を吐き出した。

美しいこの世界は、一秒一秒止まることがなく世界は滅びを迎えるようとしているのだ。

「あのや、姉さん。今さうだけじゃ、一つ聞いてもいいかな？」

白髪の少年は、黒のコートに所々に銀色の装飾が施された戦闘衣

を羽織ると、椅子に座り赤色の長髪を「△」で結んでいる姉に前置きし、「いいぞ、夜緒。どうした？」と返答されると言いにくそうに口を開いた。

「僕たちのやつてる事に意味なんてあるのかな、多分、未来永劫終わりなんて無いと思う……だから、意味すら……ないのかな、って」

戦闘衣の銀色のボタンを留め、白髪の少年　夜緒は悲しそうに目元に皺を寄せてぽつりと言葉を漏らした。その顔には隠しようの無い疲労の影を濃く現わしていて、流れ出てきてしまつた弱音を「ごめん。何でもない、忘れて」と力なく訂正した。

そこから数分間は沈黙が続いた。

壁に掛けられた時計が時刻を刻み続ける音、戦闘衣へと着替える布の擦れる音、扉の先から重く腹の底に響く鈍重な音。

その三つだけがこの空間を支配していて、二人の間には重い沈黙が圧し掛かった。

そして、次第に扉の先から聞こえる重苦しい音が小さくなると、ゆっくりと扉が開かれ、向こう側の世界に広がる夜色の闇がこの部屋に漏れ出してきた。

『　夜緒さん、紫怨さん。到着しました、ご出発を』

部屋の天井に埋め込まれた小型スピーカーから僅かにノイズの混じった若い女性の声が聞こえてきた。

それを合図に夜緒の姉である紫怨は椅子から立ち上がり、開かけた扉の前に立つた。夜緒もそれに習い後ろに並ぶ。

「なあ、夜緒」

闇と室内の光が同調し始めた所で紫怨が突然口を開いた。

「……終わりなんてない。……のかもしけねえけど　だけど、アタシ等がやつてる事に意味がないわけじゃねえ、それは絶対なんだ」

男のような乱暴な言葉。何度も、言葉遣いは丁寧に……と、訂正してきたが今の夜緒にはその乱暴な口調は力強く、ひどく頬れるものに聞こえた。

心のどこかで求めていた答えを姉から貰い、疲れで強張っていた頬が緩んだ。

それと同時に赤い双眸から涙が滲み、頬を伝つて地面に零れ落ちる。

涙を流す弟の姿を見て、慰めるよつて荒々しい手つきで弟の白髪を搔き亂つた。

「……それに、意味なんてのはほんじやなかつたか？」

黒衣、戦闘衣、自らが行く道を選んだ　理由を定めた時に着る『目的』といつ名の服。

黒衣を纏う者として　『黒衣の騎士団』として戦いに身を投じると決め時から

「分かつたら行くぞ、行く道さえ定まつてれば、ただ歩きやいいだけなんだからな」

今度は優しく、弟の髪を撫でると何か希望を見出したかのよつ、死地に向かう戦士とは思えないほど嬉しそうに闇の中に足を向け、飛び込んだ。

「……行く道さえ、か」

やつ一度姉の畠縫を反芻し、やつくりと体にやつの畠縫を染み込み
かると、同じよつて 間に飛び込んだ。

プロローグ 黒衣の騎士団（後書き）

えー、感想批評などは受け付けております。
もし宜しければ、質問等もお待ちしております。

一話 欠けた月の夜に 1・1

私の心が一番休まる時間は放課後、美術室で大好きな風景画を描いているとき。

人物画も好きだけど、子どもの頃から描いてる風景画は心が休まるというか、一番落ち着くから。

特に好きなのは、学校の屋上から描く夜の町々。

空を突き刺す勢いで聳え立てるビルとか、連続して同じ家が並んでる住宅街とか、緑が溢れる公園とか、その中でも一番凄いのが月。しかも、夜は昼間と違つて一面を見せてくれる。

やっぱり暗いと描き難かつたりもするんだけど、そんな苦労すり苦にならないほど描きたいっていう気持ちが強い。

今日もいつもと同じように、美術部の都竹先輩に付き合つてもらつてこつそり学校に忍び込んで描いてたりする。

「いやー、十月でも結構冷えるもんだよね、綾瀬っち」

都竹先輩はお気に入りの四Bの比較的濃い目の鉛筆を田元に持つていき、ビルの大きさを測りながら声をかけてきた。

「そうですねー、ちょっと薄着過ぎたかな？ 明日からマフラーでも持ってきたほうがいいですよね」

一応制服の上からコートを羽織つては来てるけど、それでもちょっと肌寒い。

手が悴かじかんで鉛筆を持つ感触が少し薄れてきてるけど、少しの乱れが絵の雰囲氣を変えてしまうこともあるから手袋は使えないし、

上にまた何か羽織るのも着膨れしちゃって恥ずかしい。マフラーあたりが体暖めるのに良いのだろう。

指先に吐息を当てる少し暖かさが戻つてくるが、それでも何秒か経つてしまふと元の冷たさに戻つてしまふ。

「ふわー、だめだね、寒い寒い。ウチも一耐えられないや、そろそろ帰らない?」

「あ、はい、分かりました。……でも、少し待つてもいいですか? ちょっと今半端な所なので……」

町の風景は全体的に描けたけど、夜空に浮かんでる月だけは手付かずだ。折角の満月なんだし、そこだけ描ければ満足なんだけど……。

「はいはい、アンタつて本当に絵好きだよねー。待ってるから満足行くまで描いてちゃいなよ」

「すいません、出来るだけ急ぐので……」

都竹先輩はそう言って筆箱やらスケッチブックやらを鞄にしまい出した。

満足行くまで……とは言つてくれたけど、あまり待たせすぎちゃうのも悪いので、早く描きあげてしまおうと刃に向かって そこで私は少し変な所に気がついた。

「月が 欠けて、る?」

雲に隠れてるとかじゃなくて、満月の一部分だけが碎かれたかのよう。じつじつとした凹凸が表面に刻まれてる。

それに……黄金色じゃなくて、少し赤っぽい気も

「ん? どうかしたの、綾瀬つち」

「あ、あの。月が……少し変じゃあいませんか? なんどいつか……欠けてるといつか……」

「欠けてる~? 確か満月だつたよね、今田」

そりゃ、夜景の雰囲気を一層に引き出してくれる、夜の象徴とも言える月は、毎日確認して、今日とこいつ日に夜景を描こうと決めたのだ。

朝起きた時にちゃんと確認したから間違えるわけないし、今日が満月じゃなかつたとしてもあの月の欠け方はどこかおかしい。

「は? 欠けてるって……月が、だよね、綾瀬つち」

「あの……端のまつです」

指さし、熱心に説明するが、先輩は眉をひそめるだけでどうやら見えていないらしい。

あんなに大きく欠けているのに、先輩には見えていないのだろうか?

「んー、視力は結構いいつもりなんだけど、見えないや。……あのさ、綾瀬つちさー、疲れてるんじゃないの?」

「……そり、ですかね。ははつ、多分そうですね。すいません良く分からぬこと言つちやつて」

少しユニークな先輩ではあるが、意味の無い冗談を言う人ではない。目を凝らし、何度も見ているので、「冗談を言つている訳じゃなくて、本当に見えていないのだろう。

確かに、先輩の言うとおり最近家で夜遅くまで絵を描いてたから睡眠不足で疲れているかも知れない。

それでも、どうしても気になるので目を「じーじー」と擦つて、もう一度見てみるが、やはり欠けている。

「疲れてるのかな。それじゃ、帰つて寝ますっ！　待たせちゃってごめんなさい！」

今見たものは疲れのせい。自分でそう言い聞かせて……鞄の中にスケッチブックと筆箱を投げ入れた。

一話 欠けた月の夜に 1 - 2 (前書き)

少々サブタイトルの方向を変えようと思いました。

今まで一話……の後は何も書かれていなかつたと思われますが、
今回から上記のサブタイトルのように、「1 - 2」のように表記させていただきたいと思います。

一話 欠けた月の夜に 1・2

侵入したのがばれない様に向きを変えていた録画カメラを元に戻し、校舎を囲むように建てられた塀を乗り越えるとようやく緊張感から解き放たれる。

自分が通っている高校とはいえ、夜に無断で侵入したら不法侵入であることには変わり無い。

校舎内に警備員や残っている職員は滅多にいないので、見つかる危険はないが、敷地内から出るときは別だ。人通りが多い場所にこの学校は建っているわけじゃないけど、民家もあるし人の目が全く無い訳じゃない。

「いやー、毎度の事ながら緊張の一瞬ですな」

それは先輩も同じようで、大きく伸びをすると安心したためか欠伸が漏れた。

私は眠くないから欠伸は出ないけど、ちよつとドキドキが無くなつて心なしか体が軽い気がする。

「……ありや、もう一時じゃないか。流石にもつ帰らないと明日遅刻するつちゅーの」

携帯を確認した先輩は屋上の鍵を手渡し、「んじゃ、ばいばーい」と手を振りながら駆けて行ってしまった。

先輩の家は、学校から見ると西側、徒歩で三十分くらい。こんな時間じやバスも電車も当然ながらないから、先輩の睡眠時間は三時間も無いかもしない。

それに比べ、私の家は東側で、徒歩で五分かからない。

……何か罪悪感が湧くけど、そんなこと気にしたらキリがないから考えない事にしよう。

鞄を担ぎなおし、家に帰るなり振り返るとそこには夜空を見上げる一人の少年がいた。

少年……というには大人のよつたな落ち着きと、風貌。だけど、どこか幼さを残した顔立ちが青年と言つよりも少年という枠に当てはめた方がいいような気がした。

黒と銀を基調とした目立つコートを羽織つており、袖から見え隠れする腕は男性としては細すぎて綺麗すぎるよりも思えたが、必要な筋肉はついていて、貧弱そつだという印象は自然と受け取ることの無い いわば、完璧な肉体。

それだけでも目を奪われるには十分であったが、少年の持つ白雪のように白い髪。それは人工的に生み出すのは不可能とも思える輝きを放ち、カラー・コンタクトでは生み出せない紅蓮の如き赤みを持つ目元。その瞳を隠すように伸びている髪の下には絵画に描かれたかのような女性的な顔立ちが丁寧に整つて納められていた。

暫く、私は彼に見とれていた。美しい、綺麗、雅、そんな矮小な言葉では表せない存在を信じられないと思つ気持ちだったのだろうか、……いや、多分違う。彼には人を引きつける、見とれさせる何かがあるのだろう。

簡単に説明するならば、今まで見た中でも一番綺麗な人だつたと

ただそれだけ。

だから、永遠に彼の容姿を忘れる事はないのだろうと、脳裏に焼きついたから。

だが、その美しさがどこか恐ろしくて、気付かれないように、とにかく、その場を後にした。

一話 欠けた月の夜に 1 - 2 (後書き)

今回は1 - 1よりも少々少なめです^ ^

……分量的に、次の展開を入れてしまうと多すぎだろッ

思われちゃうかなー、と思いまして。

でも、これからは一話よりも少ないように致しますので。

と、

一話 欠けた月の夜に 1 - 3 → 夜緒（前書き）

前回言ったように短くしようと思いましたが、残念ながらどうしても長くなってしまいました。rz

なので、丁度三つに分けることができて、尚且つ三人それぞれの視点で同じ時間枠を書いたものなので、三日間連続で投稿したいと思います。

一話 欠けた月の夜に 1・3（夜緒）

明るい茶髪のポニー・テイルが見えた。

逃げるように駆けていくその姿は何かから逃げるように必死で、その『何か』が自然と自分の事だと悟るのは考えるよりも直ぐに答えが出た。

無氣力にガードレールに背中を預け、自分の前髪を摘んで月明かりに照らしてみる。

白い、髪の毛だ。

染めている訳でもなく、歳を取つたからという理由でもない。自然とこの色になり、黒髪に戻る気配も訪れない。そして、更に普通の人間と違うのは血のように赤い瞳。

両方とも色 자체は気にしてはいないが、周りから見られる好奇の視線や避けられることは流石に気にする。恐ろしい、忌むべき存在なのだろう。

だが、そんな思考に至つたとき首を横に振り、自らの考えを否定する。

髪の色が黒色で、瞳の色も同色だったとしても普通の人間では無い事には変わりない。

空を見上げる。暗くて、都会では見つけづらい星の輝きや、世界を跨ぐ飛行機の残す明かりの中でも、一番の輝きを放つ月。

妖しく、怪しく、赤い輝きを放つ欠けた月、欠月。

人間の目には映ることのないその輝きは、嘲笑うかのように堂々と輝いて、暗闇の世界を照らし続けている。

照らす、否暗闇を巻き起こす存在。本当に恐れるべきなのは

欠月、そして 月獣の存在だ。

自らの使命を再確認して、ガードレールから背中を離す。

「まずは、姉さんがどこに行つたか探さないと……」

そして黒衣の騎士団、夜緒はその後、少女の駆けていった方向から聞きなれた重苦しい銃声を耳にすると、急いで駆けていった。

一話 欠けた月の夜に 1・3 ノ綾瀬

逃げていた。

何かが怖かつた訳じやない。でも、道で蛇を見かけたら逃げるよう、蜂を見たら怖がるように、つい反射的なものだつた。

正直な感想としてはもう少し彼を見ていたかつた気もある。

テレビでもあそこまでの美形は見たことがなかつたし、私の知り合いにもかつこいいと思える人は僅かだが存在する。でも、全員を足して彼に勝負しても勝敗は目に見えているだろう。本当にその程度のもの。

だからこそ勇気をだして声をかけてみてもよかつたし、ただ眺めているだけでも良かつた。

でも、彼が纏う雰囲気はどうか近寄りづらい、別次元に生きる人。そんな感じがした。

呼吸が荒く、心臓の鼓動がうるさいほど耳に入つてくる。さつきまでは感じなかつたのに、心の整理が出来たからかもしれない。ゆつくりと、徐々にスピードを落していき駆けていた足を止めた。逃げる事はない、逃げなきゃいけないという意思もない。

落ち着いた、心が整理できて、ようやく本来の自分を取り戻す事ができた気がする。

「胸を貫く、鋭い痛み」

そんな不幸極まりない歌が聞こえたのは本当に一瞬前の事だった。

反応できず、かといって気付いたかと言つとそうでもなく。

その声の意味を認識したのは胸に焼ける痛みを感じた後、傷口から染み渡るように言葉の意味が入り込んできた。

痛みに顔をしかめ、胸元に手を置く。

鉄だ。

固く、冷たい。黒い金属。

それが容赦なく私の胸元を貫いていた。

その金属の先は私の進行方向にあって、痛みを最初に感じたのは背中からだったと思う。つまり、後ろから突き刺されたということ。瞼が私の意志とは無関係に落ちていき、完全に閉まりきつて思考が停止するコンマ一秒前、激しく重苦しい、銃声が響いたような気がした。

一話 欠けた月の夜に 1 - 3 ソ綾瀬ソ（後書き）

連続投稿一日目です。今回は綾瀬編ということです。
……編、といふのには少し短すぎるかもしませんが、

一話 欠けた月の夜に 1・3 ノ 紫怨

マンションの屋上から見下ろす紫怨の視界には何かから逃げるよう駆けていく少女を捕らえた。

どこかの高校の制服を着て、決してジョギングという訳でもなさそうだし、それにもうふらふら学生がうわづく時間帯ではない。普段なら見かけない状況だ、気になるのは仕方が無いこと。

しかし、ゲートの不調で指定した場所とはそれぞれ違う地点に開いたため、夜緒とはぐれてしまった。一刻も早く見つけ出して合流しなくてはいけない

だが、やはり好奇心に勝る物は多くない。自らの欲求に、欲望に素直にというのが紫怨の流儀

それに、気になるのは今日が欠月で、更に赤く燃え上がるような色を放つているという事だ。いつも以上に赤すぎる。

それに、ゲートの事もある。過去一度として不調を知らされたことなんてなかつた。

それは同時に、新しい何かが起こりうることしているのではないかと、そう紫怨は本能で感じ取った。

「とりあえず、同時進行で行くしかねえか……」

面倒くさそうな口調とは裏腹に、心中では高揚感が沸きあがり、この状況をただ純粋に楽しんでいた。

革命、変化、進化。紫怨好きな言葉だ。現状に満足することなく、常に自らに『変革』をもたらす。満足などしない、常に、自らを追い込んで生まれたその言葉を心の底から愛している。

体は高揚感に任せ、五階建てのマンションから何のためらいもなく飛び立つ。その心に幾分もの恐怖心など存在しない。行動を制限するリミッターを全て取り外した異常な跳躍力。

現在地と少女を見据えた場所までに挟まれた一軒家を飛び越し、先ほど彼女の走ってきた道に衝撃を逃がし、音を立てることなく地面に着地した。

「さーて、とりあえずは尾行でもすつかな」

その瞳は獲物を刈り取る狩人の如く輝いていて　だが、今まで駆けていた彼女が止まり、胸元に手を置いている。

胸元から触れる鮮血　そして、彼女の後ろに見える巨大な影。焦りが、行動へと変化した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2197j/>

月光のアルキディス

2011年1月26日03時18分発行